

報告

“加深对遗华日本人等的理解的集会 在山梨 —你知道自己身边的“归国者”吗？”

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう りかい ふか つど いんやまなし
「中国残留邦人等への理解を深める集い in 山梨

～あなたの隣にいる『帰国者』のこと、知っていますか？～

在春分的前一天 3 月 20 日（星期六），由首都圏中心主办的活动“加深对遗华日本人等的理解的集会 在山梨—你知道自己身边的“归国者”吗？”在山梨县甲府市举行。

在甲府城（舞鶴城）的日本樱花（染井吉野樱）初开的这天，以山梨县居民为主的大约 40 人聚集在舞鶴城公园内的恩賜林纪念馆的会场，倾听了主题演讲、战后出生的讲述人讲述的两位遗华日本人的生经历。

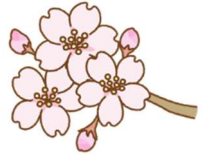
在主题演讲中，以研究东亚近代史为专攻、也担任着培养讲述人事业的综合顾问的加藤圣文先生，就“满洲国”成立的经过、为何走向了战争之路、以及造成战败后的悲剧的背景为大家做了讲话。还谈到了看似被想象又没有被认真地想象的“战争”，以及其责任的暧昧性。现在正值俄罗斯对乌克兰的军事入侵震动了国际社会，面对和平如此轻易地就会被摧毁这样一个令人震撼的现实，加藤先生在演讲中倡导人们回顾历史、每个人都有必要把这一切当作自己的事情来思考、并对现在的问题做出自己的判断。



后半部分的讲述人演讲的一个人，是有关山梨县出身的一位遗华孤儿 K 先生的人生历程。讲述人的 O 先生用通俗易懂的语言讲述了 K 先生充满苦难的半生。K 先生即

しゅんぶん ひ まえ がつはつか ど しゅとけんせん
春分の日を前にした 3 月 20 日（土）、首都圏セン
ターの主 催するイベント「中国残留邦人等への理解を
深める集い in 山梨～あなたの隣にいる『帰国者』のこ
と、知っていますか？～」が、やまなしけんこうふし ひら
ました。

こうふじょう まいづるじょう そめいよしの
甲府城（舞鶴城）のソメイヨシノ
がほころび始めたこの日、山梨県民を
ちゅうしん やくよんじゅうめい かたがた
中心に約 40 名の方々が舞鶴城
こうえんない おんしりんきねんかん かいじょう つど きちょうこうえん
公園内・恩賜林記念館の会 場に集い、基調講演
せんごう かた ベ かた ふたり
と、戦後生まれの語り部が語る、二人の中国残留邦人
らいふすとーりー みみ かたむ
のライフストーリーに耳を傾 けました。



ひがしあじあ きんげんだいし せんもん
基調講演は、東アジアの近現代史が専門で、語り
いくせいじぎょう そうごうあ とばいざー かつうきよひみ
部育成事業の総合アドバイザーでもある加藤聖文
し まんしゅうこく けい い せんそう みち
氏が、「満洲国」ができた経緯と戦争への道、そして
はいせんご ひげき う はいけい はな
敗戦後の悲劇を生んだ背景について話されました。
かんが
考えられていたようでは考えられていなかった「戦争」、
そしてその責任の曖昧さについてお話がありました。
おり るしあ うくらいなぐんじしんこう こくさいしゃかい
折しも、ロシアのウクライナ軍事侵攻が国際社会を
ゆ へいわ かんたん くず さ げんじつ つ
揺るがし、平和がいとも簡単に崩れ去る現実を突き付
けられた今、歴史を振り返り、一人一人が自分のこと
いま れきし ふ かえ ひとりひとり じぶん
として考え、今を判断する必要性を説く講演でした。

こうはん こうわ め るーつ
後半の語り部講話の一人目は、山梨県にルーツのあ
ざんりゅうこ じけー おー くなん
る残留孤児 K さんについて。語り部の O さんが苦難
み はんせい わ こたば
に満ちた K さんの半生を分かりやすい言葉で語りまし
た。K さんは、日本語は忘れても自身の名前と「ヤマ
なしけん はつおん おほ にくしんさが き
ナシケン」の発音を覚えていたことが肉 身 捜 しの決 め
て 手となりました。

便是忘记了日语，却还记得自己的名字和“亚麻那西克恩（山梨县）”的发音，这也成了他寻找亲人的决定性的线索。

第二个人是一位未判明身份的孤儿 I 女士。由 I 女士的亲生女儿，也就是与 I 女士一同回国的归国者二代讲述的自己母亲的半生，这正是一部家庭的历史。遗华日本人经历的苦难，即便是在回国后也一直持续着，并且给遗华孤儿的孩子甚至孙子辈也带来了极大的影响，这些经历深深地冲击着参会者的心。

我们从集会的参加者中收到了以下的感想。“我自身学到的是，‘了解遗华孤儿的经历，也就是当自己遇到除此以外的其他类似问题时，可以发挥想象力。’（中间省略）讲述归国者们的经历，这不是为了归国者本人，为了我们也是有必要的。当然，也是为了讲述人这点是更重要的。”真是令人高兴感想。

该活动本年度计划在新泻县举行。(H)

ふたりめ みはんめい こじ あい どうはん
二人目は未判明孤児の I さん。同伴
きこくにせい じつ むすめ
帰国 2 世である実の娘によって語られ
た母の半生は、いっか
一家の歴史そのものでし
た。残留邦人の苦難は帰国後もつづき、こ
まご せだい おお えいきょう あた
孫の世代にも大きな影響を与えてい
るのだということが来場者の胸をつき
ました。

さんか つぎ かんそう
参加された方から次のような感想をいただきました。
わたしじしん まな
「私自身が学んだことは『中国残留孤児のことを
知ることが、それ以外の似たような問題に出会ったと
きに想像力を働かせられる』ということです。(中
りやく ちゆう
略) 帰国者の方たちの経験を語っていただくのは、彼ら
のためではなく、わたしたちのために必要なのだとい
うことです。もちろん、かたがわ しゃんりょう
語る側のためにもなることは重要
ですが。」うれしい
嬉しい感想でした。

ほん こんねんど にいがたけん じっしよてい
本イベントは、今年度は新潟県で実施予定です。

(H)

